

英知通信



英知大学後援会特集号

昭和50年12月20日

英知大学

No.14

英知大学後援会報告

昭和五十年後援会役員決まる

欠員中の常任理事二名と理事三名を会長が委嘱して、役員全員が次のように決まる。(印は新役員)

会長	山口満雄
副会長	林敏雄
同	山岸陸雄
同	辻中義春
同	本多三郎
同	松井良太郎
同	深井久男
同	福田健彦
同	七浦保次
同	吉中清人
同	淡野初子
同	的場啓子
同	森山拓蔵
同	小林茂
同	牧林莊一郎
同	田中義一
同	箭内章一
同	中畑孝

(敬称省略)

◎昭和五十年後援会役員会開かる

後援会役員会開かる

1.日時 七月五日(土)

午後三時より五時まで

2.場所 英知大学会議室

3.出席者

前記役員中 欠席者二名(理事吉中清人、監査中畑孝の両氏)

4.議題

顧問岸学長、出席さる。

1.会長あいさつ

「役員諸氏の心からなるご支援と会員皆様のご協力によりまして順調に発展いたしておりますことを深く感謝申し上げます。

なお、本年四月にご入学の方々、後援会に全員ご入会をいただきまして、後援会が本格的に発展する基礎が出来上りましたことは、まことに同慶の至りに存じます。今後ともご協力賜われますよう何分よろしくおねがいいたします。」との力強いごあいさつがありました。

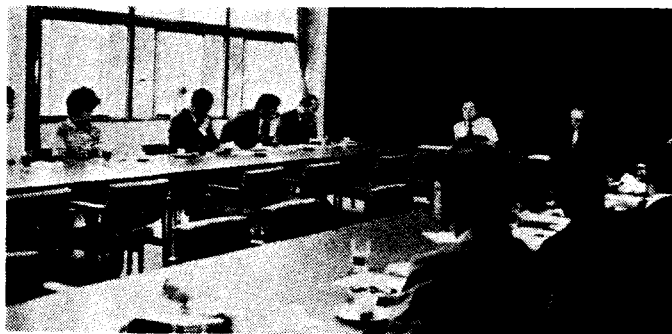
(2)学長あいさつ

「役員諸氏のご誠意と会員のご支援ご協力に対し、衷心より感謝を述べられ、次に本年度は新入生として、二七〇名の入学を許可いたしましたので、昨年度より約一〇〇名の増加になりました。図書館は文学部大学としての本学の生命でありますから、より完備したものと、前々から計画中でありましたが、世界的な不況のため、資金も思うように進んでおりませんが、なるべく早いうちに実現したいと思っております。ついで、五月十九日に会計検査院から、調査官二名が来学され、会計全般にわたって、詳細に調査されましたが、正確適正に処理されていたことを認められ、何の注意も指示事項もなく、予定よりずいぶん早く終了しました。」と本学の近況について述べられました。

(3)入会並びに会計状況について、石田書記より説明して、新入学者は全員が入会されました。従って会計状況は、昭和五十年

後、計算書通り順調に納入されておりますと、報告して承認せられる。

(4)本年度大学への助成について、山口会長より説明があり、すでに本年二月一日の役員会で昭和五十年年度には、一、三〇〇万円を助成することに決議しておりますので、九月上旬に一、〇〇〇万円、来年三月に残りの三〇〇万円を納入する予定です。



七月五日午後三時開かれた後援会役員会風景

〇万円を助成することにしてはと、はかられた結果、全員異議なく賛成決議される。

(5)その他

①御父兄から「一家庭より兄弟姉妹が学生である場合の入会金・年会費をどう納入すればよいのか」のお尋ねに対し、役員会で協議いたしました

ころ活発に意見が交換され次のように決定いたしました。「入会は父兄がするので、入会金は一家庭で納入し、学生毎に納入の要はないが、年会費は学生毎に納入する。」この決定を「英知大学後援会会費等に関する内規」の第三条の「三」の次に四項を設けて次のように入れる。

「四、すでに会員である保証人の子弟が新しく入学するときは入会金を納める必要はない。ただし年会費は納めるものとする。」

②本会則第四条四項は、会員の親睦に関することとなっておりますので、会員の親睦をはかる事業を行いたいと山口会長より提案され、役員一同賛成して、具体案作成は常任理事会に一任することに決定。

かくて、役員会の初会合にもかかわらずお互が理解しあい、英知大学の発展を願う心情が満ちあふれ、和気あいあいのうちに午後五時閉会する。(文責 石田書記)

安田理事長司式のミサ・ソレムニス

創立記念日の催し

第十二回英知大学創立記念式典は十一月一日、午前十時より講堂において荘厳裡に催された。第一部の記念式典においては安田久雄理事長司式のミサ・ソレムニスが捧げられ、岸学長をはじめ教職員、学生、後援会会員ら多数がこれにあずかった。午後からはE・S・Sやイスパニア研究会部員による語学劇をはじめ文化系クラブの公演が行われた。

後援会主催 親睦記念パーティ開く

十一月一日、菊花薫る佳き日に、第十二回創立記念日を迎え、午前十時より講堂で、大学主催の記念式典が行われ、引続いて午前十一時より「医学と信仰について」と題して大阪大学医学部教授橋本一成先生の講演があつて第一部を終る。

正午より第二部に移り、本学、始めての試みとして、後援会主催の「親睦記念パーティ」を開く、参会者実に一〇六名の多数にのぼり、東は岩手・千葉から、西は福岡・広島の遠隔から馳せ参ぜられる盛況で幕が上りました。

親睦記念パーティは、学長の挨拶から始まり、学長は「後援会は昨年発足したばかりでありますのに、多数の皆さまが入会され、熱意こもるご後援ご援助をいただき、まことにありがとう存じます。と心より感謝せられ、続いて本学は、先生と学生とが親密であり家族的な大学であつて、他の大学では学生の紛争事件が次々と起つていようであります。が、本学では、私、着任以来一度もこのようなことはございません。次に本学では外人の先生方が多いこと海外に七つの姉妹校をもち、留学生の交換など相互に協力し、その他にも留学生を受入れる大学が多数あります。今や本学はカトリック系大学として、一異彩を放つ存在として重要な地位を占めております。なお、本学は近い将来に、より充実した図書館、よりよい研究棟を建設する計画でありまして、本学に学ぶ学生の研究に役立たせたいと念願しております。この上ともご後援下さいませようお願いします。本日は多数の皆さまが来学を賜りありがとうございます。なお学生が講堂で上

演しておりますので、どうかご観賞下さい。」と結ばれる。

次で後援会より本多常任理事が挨拶せらる。「山口会長からご挨拶を申し上げる等でございますが、只今海外出張中でありまして、私が代りましてご挨拶を申し上げます。

英知大学の創立記念日おめでとうございます。心からお祝い申し上げます。



学長のあいさつ（親睦記念パーティ）

会員の皆さまにおきましては、ご多忙中にもかかわらず多くご参加いただきありがとうございます。本会場に、先生方も多数ご出席をねがっておりますので、子弟の教育について、ご遠慮なくお話しあい下さい。また会員お互い折角の機会でございますから十分お話しただきたい存じます。なお会員互いが協力して後援会発展のために尽し、大いにご後援いたしたいと存じますので、よろしくおねがいします。」と力強い挨拶がありました。

山口会長から祝電がとどき披露いたしました。

次に安田理事長の発声によって、英知大学並びに後援会の一層の発展を祝して一同乾盃し、会食に移る。なごやかな雰囲気次第にもり上がって、岸学長より先生のご紹介がある頃、会員は始めて知る先生に接して満足な様子うかがえ、ほほえましい情景が続くうちに、いつしか時間も過ぎ、午後三時、第二部の幕は下りました。

続いて第三部の大学祭を各自ご自由にていただき、学内には親達の三々五々、あるいはまた親子連れの風景が此処彼処にみられ、なごやかな大学祭を醸し出し言い知れぬよろこびを感じました。

（文責 石田書記）

オキナワ偶感

山口 満雄

（英知大学後援会会長）



すっかり洋風化してしまつたニッポンの町や村に、日本のなものを採るのは難しい。戦争前の日本に触れたいならば沖

繩へ行け——とはかねがね聞いていたし、機会があればいちど訪れてみたいとは思っていた。

おりもよし、大阪商工会議所のセミナーに参加して、念願の南の島に一步を印することができた。

那覇で講師の冒頭談話は「昭和50年8月現在……という時点で沖繩を観ないで欲しい。あの敗戦の、一望焼野が原から3年目ぐらいの日本……の感で観ていただきたい」というわけで、私は私なりに27年をフィドバックして、当時の日本のあれこれの思い浮べつつ、この島に目を観察してみようと、まず心がけたが、成果はあつたのかどうか。

ところで私は考えるのだが、謙遜な心情で、温かいまなざしで、同邦人という気持ちで、家族の一員という包容力で、沖繩の人びとと接することのできる御人が、海洋博見物に押しかけた方がたのうち、果してどれだけいらつしやるでしょう。

いっばんに、沖繩には世界一の米軍基地がある。というより、基地の中に沖繩がある、とさえ言われているが（私も幾度か聞いたり読んだりはしていたが）いま、まのあたり現場に立つてみて、やはり、心をしめつけられるものがあつた。

戦争が終つたあとも、27年間、米軍占領下におかれ、私どもの重荷を、背負いつづけてきた人びとに、私は国民の一人として

「ほんんとに、ご苦労をおかけしました」と、しみじみ頭を下げたいと思つた。これは沖繩セミナーの貴重な収穫であり、生々しく皮膚で感じ取つた体験であつたといえようか。

遙る沖繩で、海洋博開催の意義またねらいが、こころあたりにあるのかも知れない。

おわりに、屋良知事が私どもに話され、兼てこの短文を結ぼう。

「沖繩は古くから守礼之国と言われ、人びとは質素純朴勤勉な人間性をもつていた。この特質、これは日本人の特質であつた。これは貴重なものだ。その貴重なものが失われかけている今、わたしは、この特質を意識的にも育成して行きたい。この方向に若者たちを教育して行きたい。」これぞ70才を過ぎた老知事の悲願と受けとれた。

日本の風土はなくなつてはいないオキナワに旅してよかつた。という印象が強く残つている。

昭和51年度 願書受付期間

第一次 昭和51年1月28日（水）～2月9日（月）

第二次 昭和51年2月20日（金）～3月4日（木）

入学試験日・合格発表日・入学手続き期間

種別	試験の日時	合格発表	入学手続き
第一次	学科	2月16日(月)	入学料納入および入学手続き 2月25日(水)～3月3日(水) 学費その他納付金納入 3月25日(木)まで
	面接	2月17日(火)	
		2月18日(水)	
第二次	学科	3月10日(水)	入学料納入および入学手続き 3月18日(木)～3月23日(火) 学費その他納付金納入 3月25日(木)まで
	面接	3月11日(木)	
		3月12日(金)	

メルオー教授、関知子講師 フランス政府より表彰される



メルオー教授、関知子講師

「この度フランス政府より、東京のフランス大使館を通じて叙勲の報せを受けた時、喜びより先ず自己反省と責任を更めて促がされた感がありましたものである。そして実際に授与された後随分と各方面から、それも永年申訳けない御無沙汰で暑さ寒さの御挨拶すら滞っていたかたがたかたすら恐縮している次第である。大勢のかたがたの直接間接の、云うに云われぬ支えで今まで送日出来たことを心から感謝し、今後もさだめし今までに増す支援に頼らねばならぬと信じているが、今まで通り与えられた自分の瞬間状態に、誠実と責任を持ち続け度いと思っている」。

エバリエ(教育功労勲章)受賞にひきつづき、さらに昭和五十年七月フランス政府よりナショナル・オーダー、オブ・メリット・シエバリエ(メリット勲章)を授与された。これは教授が音楽を通して長年にわたる日仏文化の交流と発展に寄与された功績をたたえるものである。

英知への道

和田 幹雄

(神学科助教授)

「私が来日した目的は、司祭として布教することのみであったが、周囲のかたがたのすすめにより音楽を指導することになった。このたび、その功績を評価していただき受賞することになったが、これは夢にも思わなかったところである。また過去においてメリット勲章を授かったひとびとは貿易や実務にたずさわっていたひとがほとんどであったので、私のように物質面とはかかわりな

り知られていません。それは当然でしょう。神学は、キリスト教を最も



和田 幹雄

四年前に英知大学に来て、教壇に立たせていただいています。神学科の聖書を担当しています。神学科は、ほんの小さな学科ですが、英知大学の建学の精神であるキリスト教的ヒューマニズムを直接に追求する場として、非常に重要な位置を占めていると思います。その意味で大きな責任を感じています。神学は、日本では学問としてあま

り知られていません。それは当然でしょう。神学は、キリスト教を最も

く、ただ精神的か文化的功績のみを認めていただいたことはまれに見るところである。何といってもうれいことである」。

「この度フランス政府より、東京のフランス大使館を通じて叙勲の報せを受けた時、喜びより先ず自己反省と責任を更めて促がされた感がありました。そして実際に授与された後随分と各方面から、それも永年申訳けない御無沙汰で暑さ寒さの御挨拶すら滞っていたかたがたすら恐縮している次第である。大勢のかたがたの直接間接の、云うに云われぬ支えで今まで送日出来たことを心から感謝し、今後もさだめし今までに増す支援に頼らねばならぬと信じているが、今まで通り与えられた自分の瞬間状態に、誠実と責任を持ち続け度いと思っている」。

「この度フランス政府より、東京のフランス大使館を通じて叙勲の報せを受けた時、喜びより先ず自己反省と責任を更めて促がされた感がありました。そして実際に授与された後随分と各方面から、それも永年申訳けない御無沙汰で暑さ寒さの御挨拶すら滞っていたかたがたすら恐縮している次第である。大勢のかたがたの直接間接の、云うに云われぬ支えで今まで送日出来たことを心から感謝し、今後もさだめし今までに増す支援に頼らねばならぬと信じているが、今まで通り与えられた自分の瞬間状態に、誠実と責任を持ち続け度いと思っている」。

「この度フランス政府より、東京のフランス大使館を通じて叙勲の報せを受けた時、喜びより先ず自己反省と責任を更めて促がされた感がありました。そして実際に授与された後随分と各方面から、それも永年申訳けない御無沙汰で暑さ寒さの御挨拶すら滞っていたかたがたすら恐縮している次第である。大勢のかたがたの直接間接の、云うに云われぬ支えで今まで送日出来たことを心から感謝し、今後もさだめし今までに増す支援に頼らねばならぬと信じているが、今まで通り与えられた自分の瞬間状態に、誠実と責任を持ち続け度いと思っている」。

「この度フランス政府より、東京のフランス大使館を通じて叙勲の報せを受けた時、喜びより先ず自己反省と責任を更めて促がされた感がありました。そして実際に授与された後随分と各方面から、それも永年申訳けない御無沙汰で暑さ寒さの御挨拶すら滞っていたかたがたすら恐縮している次第である。大勢のかたがたの直接間接の、云うに云われぬ支えで今まで送日出来たことを心から感謝し、今後もさだめし今までに増す支援に頼らねばならぬと信じているが、今まで通り与えられた自分の瞬間状態に、誠実と責任を持ち続け度いと思っている」。

「この度フランス政府より、東京のフランス大使館を通じて叙勲の報せを受けた時、喜びより先ず自己反省と責任を更めて促がされた感がありました。そして実際に授与された後随分と各方面から、それも永年申訳けない御無沙汰で暑さ寒さの御挨拶すら滞っていたかたがたすら恐縮している次第である。大勢のかたがたの直接間接の、云うに云われぬ支えで今まで送日出来たことを心から感謝し、今後もさだめし今までに増す支援に頼らねばならぬと信じているが、今まで通り与えられた自分の瞬間状態に、誠実と責任を持ち続け度いと思っている」。

「このように語学と地理的歴史的知识を前提とした上で、聖書の各書が何時、どのような状況のもとで作成され、伝達され、また何を言わんとするのを読みとらんとするのである。その何を言わんとするののかについての正確な理解が、聖書学の目指す目標なのです。聖書は、このように考えると、キリスト教徒の信仰の書のみならず、すぐれた歴史書であり、文学であり、思想書であると思えます。そして、これを読みながら古代人が現代人と同じ人生のあらゆる問題にぶつかり、これに真げんに取り組んでいるのを見ることがよくあります。実際に、聖書はある具体的な歴史的条件のもとで人間の問題に取り組んだ人間の努力の積み重ねを含んでいるのです。この人間の努力の積み重ねの中に、なんだか非常に貴重な英知がひそんでいるように思われます。英知大学で、このような聖書の英知を少しでも学び、教えることが出来れば幸いだと思います。ヨブ記に次のような文があります。

「先の世代の人々に問い、更にその人々の祖父たちの究めたところを考えてみよ、われわれはほんの昨日からの存在にしからず、何も知らない。この地上の生は、かげのようなものだ」(ヨブ記八の八-九)。
このように私たちは自分の限界を謙虚に認め、先代の英知に耳をかたむけることが出来れば、英知に一步近づくことになるのではないでしょう。

カナダ・フランス留学記

渡邊 喜代子 (フランス文学科四回生)



学生ビザを取るための手続きで予定より出発が遅れ

四十八年十月にカナダ・ウィーンペックに着きました。空港にはお世話をして下さる修道院長シスター・ロレヌが迎えに来て下さってました。あたりの景色はもう晩秋、木の葉はほとんど落ちて道をふさいでいました。広々としてとても静か、空気もひんやりとして印象的でした。

マニトバ大学の分校、フランス文学科のサン・ボニファスカレッジに行きすべての手続きをすませ、最初の三ヶ月間は勉強というより、外国生活に慣れるのに必死で、気づいてみるともう前期試験、勉強も遅れ授業に出席するだけで精一杯でした。マニトバ州の冬は厳しく長く体が気候に慣れず、カナダのフランス語にも親しむ事が出来ず結局フランスにもう一度渡る決心をしました。しかしカナダ人たちの大らかさ、人なごき、親切さには感動しました。特に学長の知人であるモントリオール神学校の院長ロビド神父様、シスター・ロレヌには彼らの娘のようにお世話していただきました。夏期講座を受けた後カナダを旅行し、九月にフランスに行きました。この国は前に旅行し少し知識があり又一人旅にも外国生活にも慣れ留学生生活を満喫する事が出来ました。学校はバリアンスティチュ・カトリックに通いフ

ランス語、文学を学びました。パリに慣れるまでは寮に入り後はフランス人の友人マリエリザベスと共にサンミッシェルにあるアパートを見つけて住みました。そこでは毎日のように国際色豊かな学生たち、フランス人、ドイツ人、オランダ人……が集まってしよに夕食をしたり、時々のつづを忘れ我々に共通な問題、宗教、政治、人生、色々な事をディスカッションし、土曜日になれば十二時頃まで夕食した後、バブやディスコテークに行き朝七時頃まで踊ってました。外に出るともう日の出、歩いてコンコルド広場などを通りながらアパートに帰るのは最高に気持ちのいい事でした。

講義のない時はセーヌ川岸辺に昼寝に行ったりルクサンブル公園で日なたぼっこをしに行ったりしたものでした。どこにいてもかならずだれかと友だちになれたり、気軽に会話が出来たり、街を楽しく散歩したり、コーヒー一杯でカフェに一日中いられるのはフランス独特のものだと思えます。六月試験も終り、七月九月はフランスを中心とし、友だちとヒッチハイクの旅に出かけました。ヒッチハイクといってもスポーツと変わりなく、毎日重いリックを背負い、何キロも歩き夜は疲れきってヘトヘト、でも色々な人々に出会い、いい経験をしました。

一番外国生活で学んだ事は身分職業年齢の差なくその前に一人の人間としてだれとも接する事が出来るという事と、いかに人生を楽しく生きるかという事を一人一人が自覚しているという事でした。地下鉄の中で出会った日本の旅行

者に「日本人としての誇りを持っていきますか」と質問され、私は「地球に住んでいても月に住んでいても人間社会が存在している以上、文化・文明・生活様式・顔・形は変わっても全く同じです。その前に私は一人の人間です。日本はと問われるならば、それは私が生れ育った場所、両親がいる所です」と答えました。二年間の留学生生活を振り返って見ると語学の勉強はさる事ながら、より多くの素晴らしい友だちたちを得られた事、国境を越えた人と人との温かいふれ合いをひしひしと身を感じたという事です。特に留学に当り非常にもむずかしい手続き等スムーズに出来ましたのも英知大学の温かい援助の賜と深く感謝を致して居ります

研究室便り

○田口芳五郎教授 (神学) は十一月十日付で、精道教育促進協会より「福音宣教の神学」を出版した。本書は第二バテカン公会議とシノドスでとり扱われた福音宣教の神学的課題を平明に解説したもので、福音のために働く聖職者、一般信徒のかかざる座石の書である。

○佐伯わか子教授 (英米文学) は、十二月十日付で、R・ラッセル著「天使をこの手に」をみすず書房より翻訳出版した。なお、教授の翻訳によりすでに出版された「デボラの世界」をはじめその他の訳書はすこぶる好評で重版、回をかさねるにおよんでいる。

○西山俊彦教授 (社会学) は九月五日から二日間、国立教育会館において開かれた日本心理学会第三十九回全国大会において「宗教的パ

ソナリティの社会性」C・P・Iによる試み」と題する研究発表を行い好評を博した。また日本社会心理学会編集による学術誌「年報社会心理学」第十六号(一九七五年)に、「自我確立と社会性との相補性」宗教的パーソナリティの検討を通して」と題する論文を発表、星野命教授からは「西山教授の論文は非常に興味深い内容を有するものである」との評価を受け注目をあびている。

○ゲラリエル・ベーキ教授 (神学) はニューヨークのセント・ジュッタ・ファンデーション出版社より、Valls és Eiet Ti Kinek Tartotok Engem? 「宗教と生命あなたたちは私をだれだと言っているのか」をハンガリー語で十一月に出版した。

○染田秀藤助教授 (イスパニア文学) は、メキシコより出版されている学術誌 Servir の第五六号(一九七五年 Segundo Bimestre)に La politica de Espana Sobre los indios y Pray Partolomé de Las Casas Desde la Junta de Burgos hasta la promulgación de las Nuevas Leyes de Indias (イスパニアのインディオ政策とバルトロメー・デ・ラス・カサスブルゴス会議よりインディアス新法の発布まで)と題する学術論文をイスパニア語で発表した。

○玉谷直美助教授 (心理学) は、九月十三日より三日間にわたって宝塚市売布において開かれた上智大学人間学会において、「現代女性教育の課題」のテーマのもとに研究発表を行った。また「女性論」についてのシンポジウムにシンポジアとして参加した。

玉谷助教授は聖パウロ女子修道会発行の月刊誌「あけぼの」に「女性の自己実現」と題する記事を昭和五

十一年十二回にわたって連載することになった。

○井上博嗣助教授 (英米文学) は、五月三十一日、学習院大学において開かれた日本ヘンリ・ドヴィド・ソロー協会による研究会において、「ソローとデューキンソンにおける隠遁的生活」というテーマのもとに約一時間にわたる研究発表を行った。

また、チャールズ・E・タトル出版社より最近出版された Budhistas End Christ (パトリック・オカナ一編) という本の一章に「The Bells of Nagasaki Keep Ringing」と題する英文のエッセイを執筆した。

○高野利雄助教授 (青年心理学) は十二月十五日付で「キリスト者の道標」と題する書物をあかし書房より出版した。第一部は庶民の宗教意識、第二部、人間について、第三部、福音的人間像となっており、キリスト教に関心を有するひとびとにとって文学通り道標となる書である。

○本多正昭兼任講師 (倫理学・道徳教育の研究) は、イグナス・レップ著「心の底にあるもの」を翻訳六月三十日付で川島書店より出版した。本書は、現代人の不安や葛藤の根源を多くの臨床例に採りつつ自己回復への道を開き、既成モラルの再検討を迫るものである。

英知通信

昭和五十年十二月二十日発行

編集者 英知大学 学長広報室

兵庫県尼崎市若王寺苗田 (06)四九一―五〇八三 六六一